

大学生のボランティア活動支援における 現状と今後の課題

伊 東 美 鈴 渡 辺 裕 一

The present situation and issues of the supports of university students' volunteer activities.

Misuzu Ito, Yuichi Watanabe

抄 録

本研究では、健康科学大学福祉心理学科において今年度から実施の始まったボランティア活動支援の現状と、本学科の学生がボランティア活動及びその支援に対してどのように考えているのかを明らかにし、今後のボランティア活動支援の在り方を考察することを目的とした。

2007年10月に健康科学大学福祉心理学科に在籍する1年生から4年生の300名を対象にアンケート調査を行い、244件の回答が得られた。分析方法はT検定と χ^2 検定を用いた。

分析の結果、性別とボランティア活動への関心及び参加回数、学年とボランティア活動への参加回数、ボランティア登録の有無とボランティア活動への参加回数、大学入学後のボランティア活動経験の有無とボランティア活動への参加回数に有意な関連が見られた。

本研究では、ボランティア活動の情報提供及び呼びかけについて、より個人に向けたアプローチの必要性とボランティア活動中に感じた不安や悩み等に対するサポートの重要性が考察された。

キーワード：大学生

ボランティア活動支援

1. はじめに

近年ボランティア活動やNPO活動が注目され、その力が評価されてきている。中央教育審議会の「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」答申(2002)では、奉仕活動・体験活動を推進する必要性及び意義において「青少年の時期には、学内外における奉仕活動・体験活動を推進する等、多様な体験活動の機会を充実し、豊かな人間性や社会性などを培っていくことが必要である。」としている。さらに学生に対する奨励・支援等としてボランティア講座やサービスマニエール科目、NPOに関する専門科目等の開設や大学ボランティアセンターの開設等のボランティアをしやすい環境づくりの必要性が述べられている。

本学福祉心理学科の学生にとってもボランティア活動に参加することは大変有意義であると考えられる。なぜならボランティア活動に参加することにより何を目標として学ぶかが明確になり、学ぶ意欲が高まってくると考えられ、ボランティア活動によって現場を知ることで、将来の就職に向けた方向づけや就職活動のアプローチが可能になる。また実習前にボランティア活動に参加することにより体験による事前学習ができ、実習前の不安を軽減させることができると考えられる。

しかしボランティア活動は「自主的」・「主体的」な活動であり、いつどのように活動するのは本人の自由である。ボランティア活動をするのもしないのも、またボランティア活動を辞めるのも続けるのも本人の意思で決めるものである。強制的なボランティアへの参加はボランティア活動の特徴の一つである自発性と相反してしまう。したがっていかにボランティア活動の事を知ってもらい学生の参加意欲を高めるか、ボランティア活動への不安やボランティアでの悩みを解決させて活動を促進させていくかが重要であると考えられる。それが学生に対するボランティアコーディネーターの役割の一つであると考えられる。

ボランティアコーディネーターの業務は主にボランティア情報の収集・整理、ボランティア活動希望者の受付、広報、依頼先とボランティア活動希望者との調整、ネットワークの構築、研修や学習機会の企画・開催、ボランティア活動に関する実績やケースの記録であると考えられる。

本学福祉心理学科も学生がボランティアに積極的に参加できるよう今年度からボランティアコーディネートを始動させた。その主な活動内容は、ボランティア依頼の情報集約、依頼先と学生との連絡調整、B棟2・3階及び福祉心理学科助手室前のボランティアボードにおいてのボランティア情報の掲示、各授業でのボランティア呼びかけ、学生へ個別のボランティア呼びかけ、ボランティアニュースの発行、ボランティア登録者の管理、ボランティア登録者へメールでのボランティア情報発信である。その中でも広報活動はボランティア活動に参加してみたいと考えていてもどこで情報を手に入ればいいのかのわからない学生やボランティアに関心のない学生への呼びかけとして大きな役割をもつ。広報活動をすることでボランティア活動の窓口がわかりやすくなり、学生のボ

ランティア活動への参加意欲も上がると思われるので、ボランティアボードへの掲示やメールの配信、ボランティアニュースの発行等は特に力を入れて行っている。

依頼件数は図1の通り夏祭り等のイベントが多い7月をピークに毎月平均15件ほどの依頼が来ている。依頼は本学所在地域の実習先からが最も多く、ついでボランティア・NPOセンター（甲府市）や各市町村の社会福祉協議会等である。ボランティア・NPOセンターについては、センターが定期的に発行しているボランティア募集広告が送付されてきており、依頼件数とした。なおボランティアコーディネートは4月から活動を始めたが、4月には依頼が入っていないため5月からの実績を表示している。（以下同じ）

依頼内容は単発型のイベント（お祭り等）でのボランティアが最も多く、表1にもあるように7月には18件の単発型ボランティアの依頼が入った。また継続型の依頼は主に常時ボランティアを必要としているもので、依頼があった月から毎月継続して募集している状態のものが多い。ゆえに継続依頼の件数はその月に新たに入った依頼ではなく、前月から引き続き募集しているものがほとんどである。参加人数については毎月平均39名の学生がボランティアに参加しており、その数はのべ195名である。（表1）

ボランティアに参加している学年の比率は、図2のように3年生が最も多く月平均

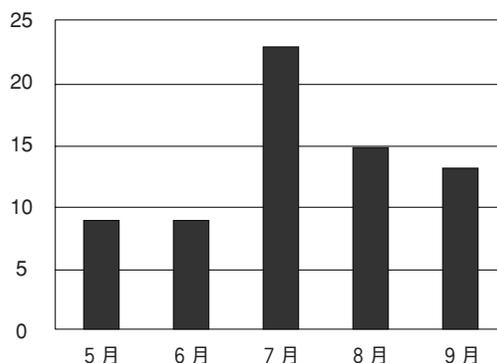


図1 月別ボランティア依頼件数

表1 月別ボランティア依頼・派遣件数及び参加人数

月	依頼件数	単発型依頼	継続型依頼	派遣件数	参加人数
5月	9件	4件	5件	5件	合計44名
6月	9件	3件	6件	5件	合計32名
7月	23件	18件	5件	10件	合計65名
8月	15件	10件	5件	6件	合計37名
9月	13件	6件	7件	5件	合計17名
平均	13.8件	8.2件	5.6件	6.2件	39名

17.2名、次いで4年生12.4名である。図中にある「他」とは本学の学生が他校の学生を誘いボランティアに参加したケースである。

3年生の参加率が最も高いのは、実習に先駆けて事前に現場での仕事を体験しておきたいという学生や、教員からの勧めで実習先と同じ種別の施設でボランティアをする学生が多いためであると考えられる。

またボランティア参加割合は図3のように男性43%、女性57%と女性の方が少し多くなっている。ボランティア登録者においても現在の登録者数42名中男性は10名と、女性32名の3分の1にも満たない。このため男性のボランティア活動参加を促す対策が必要であると思われる。

学生へのボランティア情報を発信する場として現在はB棟2・3階及び助手室前のボランティアボードへの掲示とボランティア登録者へのメールでの情報発信、またボランティアニュースの発行や各授業内での呼びかけも行っている。ボランティアボードへの掲示とメール発信はボランティアの依頼が来た時点で行い、授業内でボランティアの呼びかけを行っていく。この呼びかけは主に福祉心理学科の授業で学年全員が出席する必修授業において行っている。並行してボランティア登録をしている学生に呼びかけたり、ボランティアニュース（ボランティア情報紙）を発行し、学生に配布している。また参加希望者の少ない依頼については繰り返しボランティア登録をした学生にメールを送信するなどして対応している。

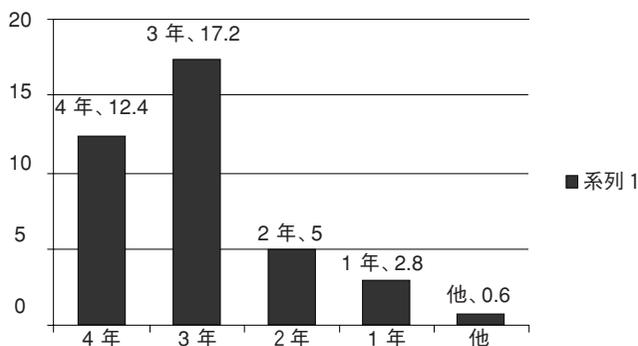
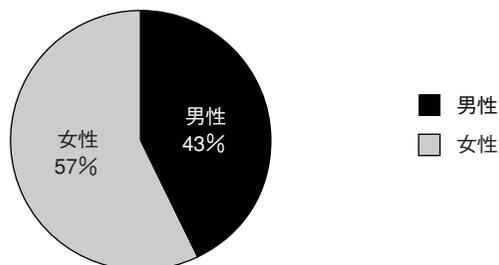


図2 学年別ボランティア参加割合

図3 性別ボランティア参加割合



本学科では上記のような活動を行っているが、他校のボランティア活動支援はどのように対応し、また学生はどのようにボランティアに取り組んでいるのか以下で先行研究を取り上げていくことにする。

大学生のボランティア活動支援に関する先行研究としては、伊藤（2006）¹⁾が心理学専攻の学生を対象にボランティア活動のもつ意味について調査しており、ボランティアを始めたきっかけは大学掲示板からの情報獲得が多いと述べている。またボランティア活動で対象者とのかかわりを通じて深く傷ついた経験を持つ者もいるため、メンタルケアの必要性を述べている。稲葉ら（1996）²⁾は高等学校における学生のボランティア活動の実態を調査し、ボランティアに興味を持ち、必要性を感じている学生はほとんどが自然に参加でき誘われなければ参加できない者は10%程度であるが、興味・必要性をあまり感じない学生は半数程度が誘われなければ参加できないとしている。

しかし本学科の学生がどの程度ボランティア活動に興味を持ち参加意欲があるのか、また現在進めている活動で学生はどの程度満足しているのか、改善すべき点や新たに求められている支援等が明らかでない。さらに福祉を専門に勉強している学生を対象とした先行研究は非常に少ない。ボランティアは実習や就職のためにも有意義であると考えられる。そこで本研究では、ボランティア活動の現状及び改善点等を把握し、学生に向けてより良い支援を考察することを目的とする。

II. 方法

1) 調査対象者

健康科学大学福祉心理学科の全学生300名（1年生48名、2年生72名、3年生96名、4年生84名）

2) 調査時期・方法

無記名による質問紙法にて、2007年10月に実施する。質問紙は学年ごとに福祉心理学科の授業内で学生に配布し、その場で回収する集合調査法により実施した。

3) 質問紙の内容

ボランティア活動の、Ⅰ. ボランティア活動に対する関心と参加等（①ボランティア活動への関心、②ボランティア活動への参加意欲）、Ⅱ. ボランティア活動の参加状況（①本学入学以前のボランティア活動経験の有無、②本学入学後のボランティア活動経験の有無、③今年4月から現在までのボランティア活動への参加回数、④参加したボランティア活動の分野）、Ⅲ. ボランティア活動の参加動機（①ボランティア活動への参加のきっかけ、②ボランティア活動への参加動機）、Ⅳ. ボランティア活動支援（①ボランティアボードの認知度、②ボランティア登録の状況、③ボランティアコーディネーターの認知度、④ボランティアコーディネーターへの要望）、Ⅴ. 基本的属性（学年・年齢・性別）について回答してもらう。

4) 倫理的配慮

調査対象者には、研究内容及び研究目的以外には使用しないことを説明し、無記名で回答してもらい個人が特定できないように配慮する。

III. 結果

1) ボランティア活動への関心及び参加意識

ボランティア活動への関心において表2の通り「非常に関心がある」・「ある程度関心がある」と回答したのは76.6%であった。またボランティア活動に参加したいと思うかとの問いについても、「とても思う」・「まあ思う」と回答したのは76.6%であった。4人中3人以上がボランティア活動に興味を持ち参加したいと考えているという結果が出た。

表2 ボランティア活動に関心がありますか

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	非常に関心がある	36	14.8	14.8	14.8
	ある程度関心がある	151	61.9	61.9	76.6
	どちらともいえない	31	12.7	12.7	89.3
	あまり関心がない	16	6.6	6.6	95.9
	全く関心がない	10	4.1	4.1	100.0
	合計	244	100.0	100.0	

また性別によるボランティア活動への参加意識は参加意識あり群で男性64.8%、女性88.9%と有意な差が見られた。男性は女性よりもどちらともいえないと回答している率が高く21.6%、参加意識なし群は男性13.6%と女性の7.7%を5.9%上回った。これにより、女性の方が男性よりもボランティアに参加したいと考えているということがわかった。性別とボランティア活動への参加回数についても男性平均1.04回に対して女性1.83回となっており有意な差がみられた。(表3)

学年を1・2年生と3・4年生に分けボランティア活動への参加意識を見てみると1・2年生と3・4年生の間に有意な差は見られなかった。しかし参加回数については1・2年生が平均0.65回であるのに対し3・4年生の平均は1.88回と有意な差が見られた。(表4)

表3 性別と参加意識及び参加回数の比較

	参加意識	参加回数
性別	** (P<.01)	* (P<.05)

2) 参加したボランティア活動の分野

分野別のボランティア活動を見てみると「障害(児)者」が最も多く46.3%、次いで「高齢者」の36.5%、「参加していない」という回答の

表4 学年と参加意識及び参加回数の比較

	参加意識	参加回数
学年	n.s.	** (P<.01)

24.6%、「児童」22.5%であった。

3) ボランティア活動に参加したきっかけ

ボランティア活動に参加したきっかけとして最も多く回答されたのは、「友人や知人からの勧め」であり26.2%であった。次に多かったのは「参加していない」との回答で21.7%、「学校で話を聞いて」という回答は19.3%で続いている。多くの回答が予想された「大学の掲示」は16.4%にとどまった。

4) ボランティア活動への参加動機

ボランティア活動への参加動機の中で最も回答が多かったのは「何か新しい体験をしたいため」という回答であり41.3%、「その活動に興味・関心があるため」という回答は32.8%であった。この2つの項目はともに体験や活動そのものに関心があるという回答であり、自らのためにボランティア活動に参加している学生が多いことがわかった。

5) ボランティアボードの認知度

「ボランティアボードを見たことがあるか」という問いに対し、表5にあるように「見たことがある」と答えた群は84.0%であり、「見たことはないが、ボランティアボードがあることは知っている」と回答した6.6%を加えると90.5%となった。ボランティアボードの存在は多くの学生が認識していることが明らかになった。

6) ボランティア登録の有無

ボランティア登録については表6にある通り「登録していないが、いずれ登録したいと思っている」という回答が最も多く46.7%を占めた。しかし次いで「登録していない

表5 ボランティアボードを見たことがありますか

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	しばしば見ている	42	17.2	17.3	17.3
	ときどき見ている	91	37.3	37.4	54.7
	見たことはある	71	29.1	29.2	84.0
	見たことはないが、ボランティアボードがあることは知っている	16	6.6	6.6	90.5
	見たこともないし、ボランティアボードがあることも知らない	23	9.4	9.5	100.0
	合計	243	99.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	.4		
合計		244	100.0		

し、登録したいとも思わない」との回答が31.8%と多くなっていた。多くの学生がボランティア活動に対し興味・関心を抱き参加したいと考えているにもかかわらず、ボランティア登録に関しては消極的な回答が目立った。

7) 助手室でのボランティアコーディネートの認知度

「助手室でボランティアについての相談やコーディネートなどを行っていることを知っているか」との質問では表7に示したように「知らない」と回答した割合が57.4%と最も高かった。半数以上が知らないと回答しており、今年度からの活動とはいえボランティア活動支援の認知度の低さがうかがわれた。

表6 ボランティア登録をしていますか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
登録しており、その情報によりボランティアに参加したことがある	24	9.8	9.9	9.9
登録しているが、その情報からのボランティアには参加していない	27	11.1	11.2	21.1
登録していないが、いずれ登録したいと思っている	114	46.7	47.1	68.2
登録していないし、登録したいとも思わない	77	31.6	31.8	100.0
合計	242	99.2	100.0	
欠損値 システム欠損値	2	.8		
合計	244	100.0		

表7 助手室でボランティアについての相談やコーディネートなどを行っていることを知っていますか

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
知っており、ボランティアの事で助手室に行ったことがある	44	18.0	18.1	18.1
知ってはいるが、ボランティアの事で助手室に行ったことはない	59	24.2	24.3	42.4
知らない	140	57.4	57.6	100.0
合計	243	99.6	100.0	
欠損値 システム欠損値	1	.4		
合計	244	100.0		

8) ボランティアコーディネーターへの要望

ボランティアコーディネーター（助手室）への要望については、「ボランティア情報を広く知らせてほしい」という回答が最も多く、43.9%であった。次いで「希望にそったボランティアを紹介してほしい」29.5%、「実習や就職につながる活動を教えてほしい」26.2%と続いている。現状では広報活動としてボランティアボードへの情報掲示、各授業内での呼びかけ、メールでの情報配信、ボランティアニュースの発行等を行っているが、より広く情報がほしいとの回答が多いことが明らかとなった。

9) ボランティア活動の困ったこと悩んだこと

「ボランティア活動での困ったことや悩んだことはあるか」との質問には「どこまでボランティアとして関わっていかわからなかった」という回答が26.2%と最も多かった。次に「何をすればいいかわからなかった」25.0%、「専門知識がないので不安になった」23.0%との回答に続いた。実際に関わりを持つ際やボランティア活動時にあらかじめ説明がなかったために、困ったことや悩んだことがある学生が多いことが明らかになった。

IV. 考察

ボランティア活動に対する関心や参加意識に関して性別によって大きな差があることが明らかになった。これは参加回数にも関係し、女性と男性で平均1回近くの差があった。前述した通り現在合計で42名のボランティア登録者数でも男女の差が大きく表れており、男性は女性よりもボランティア活動に興味・関心が少ないことが伺えた。ゆえに男性がボランティア活動への関心や参加意識を高めるような工夫をし、アプローチを考えていく必要があると考えられる。

学年別でボランティア活動への関心や参加意欲を検証してみると1・2年生と3・4年生の間に有意な差は見られなかったにもかかわらず、参加回数を比較してみると1・2年生と3・4年生では参加回数に平均1回以上の大きな開きが見られた。つまり全学年の学生に同じようにボランティア活動への関心が示されているのに、実際にボランティア活動を行っているのは、3・4年生が圧倒的に多いということである。この結果の要因としては次の2つが考えられる。

まず授業数の違いである。1・2年生は必修科目が多く月曜日から金曜日まで毎日授業が入っている。しかし3・4年生になると比較的必修科目も少なくなり時間に余裕をもつことができると考えられる。さらに3年生は実習があり、実習前の事前体験としてボランティアに参加する、または教員に勧められる学生が多くなる。また4年生は就職活動が始まり、ボランティアを兼ねた施設見学に参加する学生が増えてくると考えられる。1・2年生にもより積極的に呼びかけを行っていくことが必要であると考えられる。

次に呼びかけの違いである。現在1・2年生に向けては各学年全員が集まる授業にお

いて呼びかけを行ったり、ボランティアニュースを配布したりといった活動を行っている。3・4年生に対してはゼミのような比較的の小規模な授業をまわって呼びかけを行う、個人に対して呼びかけを行うなどの対応をとっている。このように呼び掛けの方法に各学年で差が出ている。この差は学年が上がるにつれ必修科目などの全員が集まる授業が減り、その結果1度に全員の学生へ呼び掛けることが難しくなってしまったため起こっている。その結果1・2年生への呼びかけのように大人数への呼びかけでは、あまり自分への呼びかけであるという意識がわからず内容も聞き流してしまう可能性がある。一方3・4年生の方が呼び掛けの際の距離が近く、より自分に呼びかけられているという意識が強くなるのではないかと考えられる。そのため1・2年生よりも3・4年生の方がボランティア活動への参加回数が多くなっているのではないかとと思われる。ゆえに従来までの1・2年生へのアプローチを3・4年生と同じようなアプローチに切り替えてみるのが有効であると考えられる。

ボランティア活動に参加したきっかけでは回答が多いと考えていた「大学の掲示」という回答は比較的低いものであった。言い換えれば「ボランティアボードの認知度」からもわかるようにほとんどの学生が見ているにもかかわらず、ボランティアボードを見てボランティア活動に参加する割合は低いといえる。ボランティアボードを見ても実際にボランティア活動につながることは少なく、最終的に友人などからのアプローチがなければボランティア活動をしにくいのではないかと考えられる。ゆえにボランティアボードでの情報提供や呼び掛けだけでなく、その他に学生への何らかの直接的なアプローチが必要なのではないかと考えられる。ボランティアボードは認知度を見ても多くの学生が見ていることがわかるので、引き続き情報提供の場として活用し、掲示方法やレイアウト等も見やすく興味を引くように工夫を凝らしていく。それと同時に学生に個人的な呼びかけをしていくことで今までより参加率や参加回数を増やしていけるのではないかとと思われる。

ボランティア登録に関しては、「ボランティア登録していない」と回答した群の割合が、78.5%と非常に高かった。さらにそのうちの31.8%はこれからも登録するつもりはないと回答している。これについてはボランティア活動に興味がなく、登録を考えていない学生に対してボランティア登録に関してのメリット等の情報を周知させ、ボランティア活動及びボランティア登録への関心を高めていくアプローチが必要であると思われる。

助手室でのボランティアに関する相談・コーディネート業務についての認知度はかなり低く、福祉心理学科全学年の半数以上がその活動を知らないと回答していたことが明らかになった。これは要因の一つとしてボランティアボードに助手室が窓口になっていることを明記している掲示物が少ない点や、助手室前にボランティアについての相談等を受け付けるといった内容を示す看板等の目印がないことがあげられる。ボランティアボードを見ても誰が更新しているのか、どこに問い合わせれば良いのかわからないという学生が多いのではないかとと思われる。その影響もあってボランティアボードがボラ

ンティア活動参加のきっかけの設問で解答数が少なかったとも考えられる。ゆえに今後はボランティアについての窓口は助手室であることをわかりやすく掲示し、助手室前にも何らかの形でボランティア希望者の目印になるような看板等を設置していくことが重要であると考えられる。

ボランティアコーディネーターへの要望についても広報活動をより活発に行っていくことの必要性を感じる。現状ではまだまだ学生への周知ができていないという結果が目立つため、さらに情報をこまめに更新する、助手室でのボランティアコーディネート業務の周知、各授業での呼びかけに加えて個人へのアプローチを強化する等の対応を行っていくべきであると思われる。

ボランティア活動での困ったことや悩んだことについては、かかわりでの悩みを抱える学生が多いことが明らかとなった。ボランティアコーディネーターへの要望でも心理面でのサポートが必要とされているといえるため、ボランティア活動で起こる悩みや不安に対処することは急務であると推測される。そうしたボランティア活動での不安や悩みを軽減させていくことによってボランティア活動への参加率も上昇していくのではないかと考えられる。また「何をすればいいかわからなかった」という回答が多いことからわかるように依頼者とボランティア参加者との情報の伝達がうまくいっていないケースが多いと考えられるため、そのようなケースについてはボランティアコーディネーターが依頼者とボランティア参加者の間に立ち調整していくことや依頼者とボランティア参加者との関係を円滑になるようにサポートしていくことも必要であると考えられた。さらに専門知識習得のための講習会や事例検討会等もボランティア活動を活発にさせていく上で必要であると考えられるので、そのような機会を企画・運営していく必要があると感じた。

V. 今後の課題

ボランティア活動の呼びかけについて1・2年生にも3・4年生と同じような呼びかけの方法を行い、3・4年生へのアプローチが有効であるかどうか効果を測定していきたい。女性と男性でのボランティア活動への参加意欲の差は何が要因となっているのかを明らかにしていくとともに、現在関心や参加意識の低い男性へのアプローチの方法を探っていきたいと考えている。

また今回はボランティア活動への関心や参加意識の低い学生に関する分析は不十分であった。今後ボランティア活動への興味・関心がなく参加意欲のない学生に焦点を当て、なぜ参加意欲がわからないのか、どのようにすればボランティア活動への興味・関心を示すようになるのかなどを明らかにしていきたいと考えている。特にボランティア活動に対して関心や参加意識の低い学生に対してのサポートに関する調査は先行研究もなく、今後の課題としたい。

さらに実習や就職に向けてのボランティア体験がどのように実習や就職に作用しているのか、ボランティア活動での不安や悩みの軽減のために具体的にどのようなサポート

をしていくべきかについて、ボランティア活動に参加していく上での講習会等の必要性を明らかにし、学生にどのような講習会や事例検討会が求められているのかを調査していきたい。

引用文献

- 1) 伊藤嘉奈子 (2006) 「鎌倉女子大学における心理学専攻学生によるボランティア活動のもつ意味—実態と今後の支援について—」 鎌倉女子大学紀要 第13号：15-26.
- 2) 稲葉一・石原多佳子 (1996) 「ボランティア活動の支援について」 日本教育情報学会 第12回年会：136-137.

参考文献

- 1) 川瀬隆千 「地域連携と組織運営：コミュニティ心理学の観点から見た学生ボランティア活動の課題」 宮崎公立大学人文学部紀要 第12巻第1号：78-90.
- 2) 山西裕美 (2006) 「大学におけるボランティア活動体験プログラムの実践について」 九州保健福祉大学研究紀要 第7号：93-102.
- 3) 横山貴美子 (2006) 「話し相手ボランティアの活動支援としての「養成講座」に関する一考察—ハンナ・アレントの「活動」理論を視座として—」 山梨県立大学人間福祉部紀要 Vol.1：11-20.
- 4) 久佐賀真理・俵恭子・大草理美子 (2003) 「思春期・青年期保健への若者の参画—若者ボランティアの育成と主体化に向けた支援のあり方について—」 九州看護福祉大学紀要 Vol.15：117-127.
- 5) 水野かほる・澤崎宏一 「学校現場における静岡県立大学生のボランティア支援活動」 国際関係・比較文化研究 第4巻第2号：241-261.
- 6) 筒井のり子 (1990) 『ボランティアコーディネーター - その理論と実際 - 』 大阪ボランティア協会

Abstract

Objectives : The present study aims to present the current condition of a support system for the university students' volunteer activities, started 2007. The study describes students' point of view on volunteer activities and supports, and considers related issues.

Method : The sample of this study is 301 students from Department of Welfare and Psychology in Health Science University. T-test and Chi-Square test were used for the analysis.

Results : Significant correlations have been found in the following areas. 1) Sex × students' interest in volunteer activities as well as the number of times of participation in volunteer activities, 2) A year of the student × the number of times of participation in volunteer activities, 3) Whether he/she registered for a volunteer × the number of times of participation in volunteer activities, and 4) Experience of volunteer activities before entering the university × the number of times of participation in volunteer activities.

Conclusion : These findings reveal that it is important to provide individual based information, considering students' needs and their volunteer experiences. At the same time, it is believed that support for reducing students' anxieties during activities is essential.

Key Words : University students

Support for volunteer activities